

# 石川啄木における主体と形象の相剋

——啄木論おぼえがき——

船 登 芳 雄

も く じ

- 一、評価の基点と問題
- 二、主体の変革
- 三、主体と形象の相剋
- 四、結 語

## 一、評価の基点と問題

石川啄木を論ずるとき、われわれは、彼の生きた時代の文学的背景となった、自然主義文学をぬきにして論ずることはできない。ましてや、日本の近代文学が、その独自のジグザグの路を辿りながらも、一応の文学的定着を示したのは自然主義文学においてだとすればなおさらのことである。したがって、直接啄木の内部に立ちいる前に、自然主義文学を一瞥したい。

概括的に言つて、当時明治四十年前後の新しく導入された自然主義文学の隆盛は、文学開化の「日の出前」の呼称をもって迎えられた。いわゆる「自然派にあらざるものは文学にあらざる」という、い

きおいであった。そこで、自然主義文学の史的内容はいったいかなるものであるかということが、問いただされてくるのであるが、しかしながら、それは一般に「破戒から布団への屈折」として評価しなければならぬような、本質的に文学そのものの自己喪失であった。言いかえれば、本来の文学が健康であればあるほど、追求されねばならない人間の豊かな全体性と、社会的現実への視野がきりすてられ、国民的な生活の内面から隔絶された袋小路におちこんでいったのである。その方向は、明治四十年に、田山花袋の「布団」が成立し文壇的絶頂をうけたとき決定的なものとなり、もはや、前年の島崎藤村の手になる「破戒」が、自然主義文学への踏み出しにおいてつかみえた、社会的 content とまっとうな近代的自覚はおしつぶされてしまふにいたつた。のみならず、「私小説」という、現実の非生産的な場における作者がなまのまま文学的現実の場へ主人公として登場する、安易にふけこんだ文学形式が直接的にはここに深く胚胎したのである。

こうした特殊な日本近代文学の形式は、「上からの近代化」とい

う明治の社会のありかたと決して無関係ではない。そればかりか、もつとつこんで当時の社会的状況をうかがつてみると、日露戦争後資本主義的支柱を強固にした絶対制権力は、ようやくめぐめざめようとする国民の前に、その正体をいよいよ露骨に示はじめているのである。すなわち三十九年のはじめ、ごく反動的な桂内閣が一時しりぞいた時、わずかにあたらしい局面がひらけたように考えられたのであるが、それも束の間、四十年には日本社会党が禁止され、平民新聞は廃刊となる。そして四十一年の赤旗事件を経て、四十三年の大逆事件を頂点とする、無類の「冬の時代」が準備されるのである。自然主義文学は、こうした権力の重圧のまえてずると自己の陥穴を掘っていたのであらう。

明治四十一年六月の「太陽」誌上に、自然主義の理論的指導者長谷川天溪は、「現実主義の諸相」という論文を寄せて次のように述べている。

各個人の自我は、此の国家主義を抱いて、而も現実とは何等の衝突をも見ぬ。我等は日本人であるから、日本々位の種々なる運動や、思想と、必ず一致しなければならぬのである。乃ちこの自我を日本帝国といふ範圍にまで押し拡げても毫も現実と相離れ、或は矛盾するやうなことは無い。

これこそ、見事な近代的自我の屈服の論理である。日本の近代社会が封建制との交合妥協によって成立してしまつた以上、もはや、近代的人間の自覚は、既に規制の役割を果している近代社会とのたたかひとしてしかありえず、したがって、権力との対立は、ぬきざしならないものであつたにもかかわらず、天溪は、臆面もなく自我

放棄の証明ともいうべき詭弁を吐いたのである。その上、彼は以上の確認の上に立つて、つまり全くあたりさわりのない、「此の国家に生れて現実を描写する」という線上に「国民的文学の発展」を唱道するナンセンスを、あえておかした。かつて北村透谷が叫んだ「国民的文学」の問題は、高山樗牛によって見事な変質をうけたのであるが、いまふたたび、かくもすくいがたいものとなってその相貌をあらわにしたのである。

明治四十年代に、文壇の主流であつた自然主義文学は、そのような本質的には文学流産そのものであつたにもかかわらず、幻想的繁栄をきそつたのである。

では、こうした文学のありかたに対して、当時真向からきりこんでいくものはいなかつたらうか。自然主義文学の人間疎外的な文学喪失を、きびしく追求していったのは、ただひとり若い石川啄木に指を屈するのである。彼が明治四十一年秋から翌年にかけて發表した幾つかの評論・感想はそれを明らかにしている。「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」「文学と政治」・「性急な思想」等の過程を経て、四十三年八月に執筆した「時代閉塞の現状(強権・純粹自然主義の最後及び明日の考察)」は、権力と自然主義に対する完膚なき批判の書である。唐木順三氏は、こうした自然主義文学に対する啄木の関係を、フォイエルバッハに対するマルクスの「ドイツチエ・イデオロギイ」に比したが、それは幾分誇張的表現だとしても私もやはりここに、日本近代文学史における啄木評価の第一の基点を見出すのである。

周知のように、彼は二十七歳の短い生涯をあかも焼けつきたよ

うにしておいたのであるが、いったいその若さをもって自然主義文学にたちむかう自己の文学的主体を、どのようにしてつくりだしたのであろうか。しかもそれは僅かに数年間の驚異的な結実であった。桑原武夫氏はこうした啄木の結実を、「もし一人の啄木がなかったならば、明治文学いな日本近代文学に深く欠けるところのものがあったであろう——青春。日本民族は、古来つねにおおわれていたその美しい青春を、この天才のうちに一挙に開花せしめたといえる。」と評価し、更には西欧の日本文学研究者は、「日本の近代の文学ではたしかに天才と認めなければならぬ人物」であり、「非常に世界的な人物」だとたてている。

けれども、啄木のすぐれた成長とその裏にかくされたちみどろの苦闘を、悲劇的な「天才」という呼称を与えることによって代置してはならないだろう。つまり、そういうふうな啄木をとらえることは、一種のいとうべき偶像化であり、したがって俗流化である。

われわれは、啄木の場合、まず第一に、彼の主体のどのような自己変革が、徹底的な自然主義批判をなさしめる「力」を獲得していったのであるかという、その過程をといただすことが必要である。

第二に、そうした主体の変革と、実際にうみだされた文学作品——短歌・詩・小説の関係を基本的にはどのように評価したらよいかということ、つまり、各ジャンルの側面から照明を用意するというよりは、むしろ、それらが、啄木の内面でのどのような連環をもつて存在し、主体の変革とそうした文学形象とはどのような関係にあったのか、ということが追求されねばならないと思うのである。

註(1) 島村抱月「文芸上の自然主義」明治四十一年一月「早稲

## 田文学

註(2) 同氏著「近代日本文学史論」

(3) 岩波版石川啄木全集刊行予告パンフレット同氏「日本民族の青春」

(4) 座談会「私たちの見た日本文学」D・キーン氏の発言、昭和二十九年十一月「文芸」

## 二 主体の發展

啄木が、文学をもって自己の人生の出発とした、初期の文学的主体の基底を形成していたものは、「理の有無は兎も角、謀反といふこと程花々しく痛快なるは無かるべく候」(明治三十九年九月十三日) 川上賢三宛書簡 という、彼の性格的反逆心であった。

既に明治三十七年十一月発表の感想「秋風一束」のなかで、彼はその本領をいかに発揮している。すなわち、第一項に「反抗の人」と題し、「高貴なる歴史は常に」「猛烈なる時代の反抗者」によって「新らしき頁を開く」と論じ、一方いまの時代が必要としているのも、やはり「偉大なる反抗の人」だといひ、そのような人間こそいいかえれば、「猛烈なる真理と美の勇者」であるとしたり。そして次のように書いている。

吾人は斯くの如く考へ来つて、満身に歓喜の鼓動と共に、真理と美との不滅のために凱歌を唱へ偉大なる人格を以て一世に反抗する人のために進行の曲を奏せざるを得ず。

そして、三十八年の五月に出版した詩集「あこがれ」一卷は、当時の彼にとっては、ある意味で「真理と美との不滅のための凱歌」ではなかつたらうか。

ように書いている。

これは鬱勃たる革命的精神のまだ渾沌として、その胸に渦巻いて居るのを書くのだ。題も構成も恐らくは破天荒なものであつた。革命の大破壊を報ずる暁の鐘である主人公は自分で、奇怪な奇妙な人物許り出てくる。これを書いて居るうちに、予の精神は異様に興奮して来た。(前掲「八十」)

そうしてうまれた作品は前半と後半とに、その内容がわかれ、S村尋常高等小学校職員室を背景に展開される。まず、作者の分身である新田耕助をして型破りの課外教育をおこなわしめ、彼が作詩した唱歌を生徒達が愛唱しているところから、「十幾年間身を教育勸語の御前に捧げ、口に忠信孝悌の語を繰返す專正に一千万遍」もの校長や首座訓導の反感をまねき、禁止を強要されるといふ事件がおこるのである。それに対して、主人公はたくみな論理をもって抗争するが、彼に絶対的信頼を寄せている生徒達はますます高唱してレジスタンスを示すのみならず、一方若い女教師も彼に同調する、といった情景がつぶさに描かれている。後半は、突然あらわれた未知の奇怪な青年と主人公との対話がくりひろげられる。その青年は作者のいまひとりの分身とみられる天野朱雲の紹介状をもって、帰郷のみちすがら立ち寄つたのである。

以上のようなプロットをもつ「雲は天才である」の、文学的価値についての論議はあとにゆずるとして、啄木の主体の問題に即して考えてみよう。この小説執筆の二十日前、「破戒」を読んで藤村を評し「革命健児ではない」といった啄木は、「破戒」において大きな欠陥となつて居るところの、主人公と生徒達との関係の断絶を、

こうした啄木の浪漫的なあこがれの自己陶醉が、たえず動揺しながらもあたらしい主体をきりひらいていき、晩年の自然主義批判の主体を獲得していく過程は、大別して次の三段階にわけて考えられる。第一段階は、浜民村での彼のいわゆる「たたかい」の生活における変革。第二段階は、北海道での辺土の生活環境における新聞記者生活、および社会主義に初めて接したことによる変革。そして第三段階は東京生活であり、彼の生涯を決定した重要な期間である。

第一段階の、明治三十九年三月よりはじめられた郷里浜民村での生活は、一家五人の糊口のにない手となつて、おそいくる貧困とたたかわねばならなかつた時代である。月給八円の代用教員となつて、四月十三日(土)教壇に立つことになつた彼、「我が自伝が、この日、また新しい色彩に染められた」と日記に書きつけている。そして翌年、「予は新運命を北海の岸に開拓せんとす」(明治四十年日記)として渡道を決意するまでの一年間、生活それ自身をたたかいとして意識する、彼の現実に対する批判的主体の發展にとつて極めて重要な、それゆえに基本的に未分化なものをふくみながらも、ゆたかな内容の生活をおくつた。

そして、丁度この頃「これから自分も愈々小説を書くのだ」(明治三十九年「八」)という、新しい決意にもえて小説の筆をとり、「雲は天才である」を始め、百四十枚の「面影」と「葬列」が浜民生活の直接の収獲としてうみだされた。

この未発表・未完の処女作「雲は天才である」は、彼自身のその頃の生活と主体の実態を実によく反映しているといえる作品である。彼は七月三日に着手したこの小説のモチーフについて、日記に次の

この作品においては実にするどく一体化して描きだしている。つまり、「破戒」のシチュエーションのなかでは、丑松の生きるみちは、生徒達との共同のいとなみの場所においてしかありえなかったにもかかわらず、丑松はみずからの告白の重みに耐えかねて、生徒達の前面に土下座し、しかもなお祈りにも似た生徒達の信頼を裏切るといふ結末を辿る。したがってその点に關していえば、「雲は天才である」における新田耕助と生徒達とのしつかり結びあわされた關係は、たしかに「革命」的であり、その力に支えられて、彼は社会の俗悪な秩序にくみこまれた封建的教育の傀儡に、勇敢に立ちむかっていくことができたのである。このような關係を文学の内部で形象したのは、日本の近代文学において、この作品をもって嚆矢とするという意味では記念すべきものがある。けれども、注意しなければならぬのは、主人公の生徒達とのつながりかたが主観的でありその行動も、客観的な実体性をその内部にもちえない、あくまでも浪漫的な反逆であるということだ。

この作品の後半の部分は、それをあますところなく証明している。ここでは前半における場合と異なり、内容の上での主人公は、新田と奇怪な青年との間に語られる、会話のなかに登場してくる天野朱雲である。彼は世俗的な慣習のすべてに反抗し、貧窮と孤独にいきる「人生の戦士」であり、「天才」である。こうした天野朱雲の、「壮烈な最後を遂げるからならんば前進」という哲学の具体的な行動体として新田が存在しているのである。この「雲は天才である」の作品において指摘したことは、とりもなおさずそのまま、啄木自身の主体の問題であるのではなからうか。彼は本質的にまだ浪漫的な反逆である。

る。(略)

要するに社会主義は、予の所謂長き解放運動の中の一齣である。そして、「明星」の文学の現状と、主宰者の与謝野鉄幹についても次のように論ずる。

新詩社の遺方には臭味があると、自分は何日でも然う思う。

此臭味は、嘗て自分にもあった(かも)知れぬ。然し今は無い。毫末もない。(略)与謝野氏自身の詩は、何等か外来の刺激が無ければ進歩しない。それは詰り、氏自身の思想が貧しいからである。

すでに、かの初期における、情感の個性的開花をもたらした健康さをうしなつて、歪曲され反動化され、その末期的症状をあらわにした、新詩社文学とその主宰者に対して、啄木はかかる自己の批判的發言を準備しつづつたのである。

そうした帰結の上になつてこそ、はじめて彼は自然主義をうけ入れることが可能だったのであろう。しかもそれは単に無条件な導入の仕方ではなくして、「卓上一枝」(明治四十一年二月)で展開したように、「一切の法則と虚偽と誤れる概念とを破壊して在るが儘なる自然の真を捉げ来り」うとする、自然主義の否定的リアリズムの意義を確認しながらも、一方「成る様に成る」という無方向な「現実暴露の悲哀」についての不安を表明しているのである。

さらに、かつて「林中書」で示された哀れなる日本への愛情は、明確な意識的發展をとげて、「卓上一枝」におなじく述べている。「目を上げて社会を見るの時、我が目殆んど皆裂けんとする。目を落して静かに社会を思ふの時、我が心忸怩として黯然たり。不知、

的な反逆主体をふみだしてはいなかった。けれども、そのなかに後年彼の背骨となりうるような重要な核が、未分化のまま成長しはじめていたのもまた注目すべき事実である。すなわち、この年の十一月に草した「林中書」の一節に、次のように論じているのも、發展的因子としてのその性格を如実にあらわしているといえる。つまり、「日本人は近代文明を衣服にして纏うて居る、露人は之を深く腹中に藏して居る」と。

當時の文学者のなかでは稀有のこうした現実に対する批判が、日露戦争の余蘊さめやらぬ現実のなかで、二十一歳の白面の青年の口をついてでた言葉であるの思うとき、われわれはその時代感覚の鋭さにおどろく。

ところが、このような浜民村での生活は封建的環境の迫害によって、翌年五月故郷を追われるという結果を生み、「食を求めて北へ北へと走って行く」約一年間の北海道生活が横たわるのである。函館におちついたのも束の間札幌へ、札幌から小樽へ、小樽から釧路へと流浪する生活のなかで、彼はもはや天才という揮発性の言葉にも酔わなくなった。一方記者という職業によって、貧困な彼の場合の政治への関心が、ますます促進されていったことと、社会主義に接する機会をもったことは、この期における最も注目すべき問題である。

四十一年の一月早々、彼は日記にこう書きつけている。

此の驚くべき不条理は何処から来るか。言ふ迄もなく、社会組織が悪いからだ。悪社会は怎すればよいか。外に仕方がない。破壊して了はなければならぬ。破壊だ。破壊だ。破壊の外に何があ

此社会を奈何。一念茲に到る毎に、我が目革命の血を見る。」しかもその革命的情熱はもはや単なる英雄的気負いではなくなった。

「紀元節」の日の日記(明治四十一年二月一日)で 天皇制の發生にふれて正しい歴史観を示しているように、つまり、故山浜民村の生活につづく酷寒の僻地の一年間は、人間生活の現実に対する直視の眼を、政治的社会的視野の拡大のなかでよりするどくしたのである。このことは、啄木の反逆的主体がもはや憧憬的な浪漫性をふみやぶって、全くあらたな道をひらく、科学的基礎獲得の端緒をつかんだことを物語るのである。

けれども、そうした自己の主体に誠実であればあるほど、それはいたまじいたたかひであった。すなわち、自然主義文学のあたらしい興隆を対岸の火災視することができず、「自己の文学的運命を極度まで試験せねばと矢も楯もたまず」、釧路をあとに上京したものの、小説執筆の死物狂いの努力も空しく、自然主義文壇のいれるところとならなかつた。おそいくる生活的窮迫を前に、あたかもトンネルのくらがりて、のたうつような煩悶と自嘲の一年間を送ったのである。

噫、死なうか、田舎にかくれようか。はたまたモット苦闘をつまけるか?(略)死んだ独歩氏は幸福である。自ら殺した眉山氏も、死せむとして死しえざる者よりは幸福である。作物と飢餓、その二つの一つ!(明治四十一年六月二十七日)日記

こうした生活のなかで、彼の反逆的主体はついにその危機をのりこえた。「自分で自分を批評し、呪咀し、冷罵し、鞭撻し」(明治四十三年三月三日)「宮崎大四郎宛書簡」てのりこえた。つまり、自然主義文学から落伍

することによって、よりするべく批判的に自己をつき出していったのである。この関係は特に重要だ。したがって、その絶望的な状態をくよりぬけた四十二年十月頃から、翌年二月頃にかけて、せきをきったような活潑さで、評論活動を展開するに至ったのである。「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」「一年間の回想」「巻煙」「弓町より」「性急な思想」等、これらはすべて執筆前一年間の現実的な苦悩の沈潜をぬきにしては考えることができないのではなからうか。彼はそれらの評論のなかで、今や文壇を一色に塗りつぶしている自然主義文学の社会的現実に対する隔一線の傍観的視照に対して、鋭い一矢を放ちながら、次のように語っている。

長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場から「国家」といふ問題を取扱った時——、一見無難作に見える苦しい胡麻化しを試みた。(と私は信ずる。)謂ふが如く、自然主義は何の理想も解決せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も国家の存在と接触する事がないのならば、其所謂旧道德の虚偽に対して戦った勇敢な戦も、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。道德の性質及び発達を国家といふ組織から分離して考えることは、極めて明白な誤謬である。

今私にとっては、国家に就いて考える事は、同時に「日本に居るべきか、去るべきか」といふ事を考へる事になって来た。(掲前「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」)

こうして、啄木の反逆的主体は、「国家といふ既定の権力」と、正面から向きあわざるをえなくなってきたのである。そのた、かいは、一面では永井荷風に向けられたように、当時の近代人がより近

た頃から、彼の主体の内部に根を張っていた、個人主義思想の現実的基盤が、その余地をうしない始めたことである。

彼は、こゝでまた人間としての危機に遭遇したのであるが、「二重生活」という、いたましい方法をもって現実に固執することによって耐えた。ところがこうした彼の主体に衝激を与えたのは、明治四十三年六月の大逆事件の発生である。それは彼の固執していた現実そのもの、大震動だった。このはげしい影響の下に執筆されたのが、有名な評論「時代閉塞の現状(強権、純粹自然主義の最後及び明日の考察)」である。これは詳細に紹介しつくされているので簡単にふれる。内容は直接的には魚住影雄の論文「自己主張としての自然主義」の批判として書かれたものであるが、その本質は、みずからの辿りついた到達点の集約であり、社会の基礎構造とその反映形象としての文学との、基本的関係のありかをさぐりあてようとした、近代文学評論中画期的なものである。そのなかで彼は自然主義の正体をおどろくべき確かさをもって洗い上げ、完膚なき批判をつくした。それは時代を閉塞させている国家権力を敵として認識する地点からうまれた。

すなわち、

斯くて今や我々青年は、此自滅の状態から脱出するために、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してある。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起って先づ此時代閉塞の現状に宣戦しなければならぬ。(略)

石川啄木における主体と形象の相剋

代的であることによって、「第一期の梅毒患者」のようにコスモポリタン化していくと論じ、痛烈な否定の声をあげたが、石田田正氏の分析したように、時代の絶望に抗する過程でふかまっていった、はげしい祖国と民族への愛情、つまり、「現在の日本を愛する能はざるもの、また更に一層真に日本を愛するものならざるべからず」(明治四十二年)という確信がうまれていったのである。したがってそれは、親友金田一京助博士が、昭和二年に発表した文章のなかで、この頃「思想的傾向は著るしく国家主義的色調を帯びるやうになってきた」といわれ、ほど定説化されているところの、いわゆる「国家主義的色調」という通常概念とは、その内容においても質的に異っているのである。ともかく、このように自己のあたらしい主体を準備した啄木ではあったが、民主的勢力の微弱な、絶対制権力の下では、その方法において具体的実践的であればあるほど、「生活の改善、統一、徹底」という莫然とした方法の確認しか行うことができなかった。しかもそれすら言葉もかわかないうちに、「生活を真に統一せんとすると、其の結果は却って生活の破壊になるといふ事を発見」しなければならなかったのは冬の時代の現実との格闘において必然的であり、「我等の人生は、今日すでに最早到底統一することの出来ない程複雑な、支離滅裂なものになってゐる」という断定の下に、「二重の生活を営むより外に、この世に生きる途はない様に思つて来出した」(傍点啄木)と沈痛に語っている。

この事実を、いまひとつ違った意味で注意しなければならぬのは、まづとうな近代人間たろうとする自覚をつうじて「余は余一人の特別な意味に於ける個人主義者である」(明治三十九年三)と信じ

これ実に我々が未来に向つて求むべき一切である。(略)必要は最も確実なる理想である。(略)

私の文学に求むる所は批評である。

啄木は、この評論においてはつきり権力と対立的な国民的批判精神を自己のものとしたのである。したがって狂暴な弾圧に屈せず、国禁の社会主義書をむさぼるように読み、大逆事件公判のなりゆきに異常なる関心を寄せたのである。

つまり、その年の暮、友人である同事担任弁護士、平出修宅で「徹夜して幾千枚といふその予審調査を盗み読み」、翌年の元日早々から、やはり平出氏を通じて、更に幸徳秋水が獄中から書き送った「陳弁書」を借用してきて書きうつすという熱心さだった。この年一月中の日記は、ほとんど毎日大逆事件関係の日記で埋められている。そして彼自身が調査、編集した「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」や、V. NAROD. SERIFS (人民の中へ叢書)と題した幸徳秋水の陳弁書の写しである。A LETTER FROM PRISON (獄中からの書簡)と、それに附した EDITORS NOTES (編集者のノート)は、大逆事件に寄せた深い関心の所産であり、近代史の重要資料でもある。またその EDITORS NOTES には、クロボトキンの自伝「革命家の想い出」からの英文抜萃を一部おさめているが、彼はクロボトキンを通じてロシアのナロードニキイ運動に深い関心を示したのである。

この間、一月九日の瀬川深究書簡には、「僕は必ず現在の社会組織経済組織を破壊しなければならぬと信じてある。これ僕の空論ではなくて、過去数年間の実生活から得た結論である。(略)僕は

他日僕の所信の上に立つて多少の活動をしたいと思ふ。僕は長い間自分を社会主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない」(傍点引用者)と書いた。

しかし、そうして自己を生かすために「人民の中に行」かねばならない必然に気付いたのも束の間、願ひむなく、結核の病床に倒れてしまった。つまり、彼自身の内部に、たにかいの主体がちみどろの苦闘を通じて確立されたとき、同時にそれは自分自身のからだを自由にするのできない、「蕩搔けば蕩搔くほど、足搔けば足搔くほど、私の足は次第次第に深く泥の中に入つ」(明治四十五年一月一病室より)ていくという惨苦と焦躁感をあがなわねばならない時代状況だった。

けれども、なおそうしたまにたえないたましきの中で「AM YOUNG」と語る彼の言葉は、主体の若々しい健康さを如実に物語つてゐる。

註(一) 「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」明治四十二年十一月二十五日稿、「一年間の回顧」十二月二十二日稿、「巻煙草」同二十三日稿、「弓町より」同十一月三十日、十二月七日東京毎日新聞所載、「性急な思想」同四十三年二月十三日より三回東京毎日新聞所載。

(2) 同氏著「統民族と歴史の発見」五十四頁。

(3) 同氏著 角川文庫版「定本石川啄木」百五十八頁。

(4) 明治四十三年三月十三日 宮崎大四郎宛書簡だが、この頃の啄木の問題意識について本誌二号に発表した小稿『我等の一団と彼』における啄木の問題』で論じた。

に起因するか。燃えるような文学への情熱と、実生活の破壊という二律背反のなかで、彼の自己を文学に生かす道へのいたましい模索は、自己の青春への哀惜を捨てきれなかったのである。

にもかゝらず、我々はすでに盛岡中学三年在学の冬、足尾鉾山鉾毒事件の被害者である貧しい農民救助のため立ちあがり、号外売りをして義捐金を集めた、彼のヒューマニテイに注目せずにはおれない。そして、故山の少年農民を愛し晩年は大逆事件の犠牲者に寄せる積極的関心が象徴するように、具体的には、祖国と祖国の現実を固執する深い愛情が、啄木の変革をつらぬくヒューマニズムの核をなしていたと言つてよい。

このように、日本近代の文学者のなかで、もっともするどく国民的な場へ自己をつきだしていった啄木の主体の形成は、ではいったいその内面で、小説・詩・短歌などの文学形象の問題と、どういった関係にあったのだろうか。

まず、その場合第一に、小説との関係を明らかにしなければならぬ。彼がもっとも努力をふりしぼったのが小説であり、そここそ、啄木の文学全体を解く鍵が伏在していると考えられるからである。

彼の文学的出発となったのは、詩集「あこがれ」であるが、それは、文学的には若い啄木の稚氣と模倣の所産であった。そうしたあこがれの詩の世界の安住者ではなくなり、小説の筆をとつたのは浪民の教員時代であり、生活のたゞかゝいを通して、社会的現実との対決を自己の主体に課さねばならない時期であったのは、注目されねばならぬ。もっとも、自己の文学的運命を、「散文の自由の国土」

(5) 前掲「定本石川啄木」百六十三頁。

(6) 一八九八年から翌年九月にかけて英文で発表した回想録。

(7) 事実土岐善麿と「樹木と果実」発刊を策したことは周知の通りである。

(8) 明治四十四年二月十四日 小田島理平宛書簡に述べている。

### 三、主体と形象の相剋

前章においては、啄木の性格的反逆が浪漫的主体の形成へ、さらに社会主義への積極的関心を軸とする、実践的主体をめざして自己を変革していく過程を辿つた。

しかし、その過程は、彼の実生活を代償としてあがなわれたものである。そこに彼の悲劇があり、強さも弱さも蔵されていると言つてよい。だが、二十歳にして、一家の家計を背負わねばならなかった彼が、もし実生活の調和者たることをめざしたとすれば、とりもなおさず、文学者啄木の死を意味したであろう。

晩年にまで残る、彼の自己中心的な傾向は、未成熟な近代社会の実生活において、いやおうなしに身を沈めねばならなかった二律背反の苦悩のなかでこそ、正当に腑分けされねばならないだろう。

高柔純夫氏は、彼の自己中心主義が、ヒューマニズムの血肉化をさまざまと論じている。たしかに、「同苦と共甘」、対象に対する人間的な生命燃焼は、ヒューマニズム成立の基盤として欠くことのできないものである。そして、啄木においては、自己中心の感動、愛着が強かったことも否定しきれない事実である。では、彼がはげしい変革を生きぬきながらもそれを止揚できなかったとすれば、何である、小説にかけようとしたのは、現実認識の深まりをもっと鋭くする北海道生活の後である。そして、「日本の新時代の文学は、矢張り小説とドラマだ」「僕にとつて小説は(略)現状を打破して新世界を作る為の唯一の武器だ。」というふう(1)に明治四十一年七月七日岩崎正宛書簡に述べているが、この発言は極めて重要である。こゝには、近代社会と小説ドラマの関係、および武器として小説(文学)を把握する見解が断片的ながら披瀝されている。

一般に、日本に限らず近代文学の歴史は小説中心であるといわれているが、丸山静氏の説明されているのを見ると、小説とは近代社会の「客観的な力との対決の場において生み出され、そのような客観的なものを反映する特殊な文学形式」であり、「近代的ヒューマニズムが小説の発達をひきおこすモチーフ」であるとしている。したがって、小説は近代社会の、最も有効な文学の支配的ジャンルとなりえたのだろう。啄木の場合、私は、まさにそのヒューマニズムを指摘したが、それは近代社会においては当然の帰結として、小説のモチーフになりうるものである。そして、啄木の主体が現実の「客観的な力との対決」を意識したとき、「現状を打破する唯一の武器」として、小説を把握するのにもまた必然だったのである。

ところが、従来啄木と小説とのこうした基本的な関係が意外に等閑視されてきた。一面的に稿料めあての冒険とするような解釈は捨てねばなるまい。たとえば、岡邦雄氏ですらその好著「若き石川啄木」において、「彼をして小説に筆を執らしめたものは、当時に於ける彼の生活の困難に基づく焦燥と、何等の根拠なき自信とであった」と断言している。だがそれは、やはり正しい捉え方ではない

らう。  
 それでは、更に一步すすめて、啄木の小説とはどんなものだっただろうか。彼の小説は、「雲は天才である」から「我等の一团と彼」に至るまで判明しているものでは、未完のものをふくめて十六篇の作品と、それから現存している三十九篇の断片原稿がある。こうした作品に始めて積極的な評価を下したのは、窪川鶴次郎・小田切秀雄両氏である。

とりわけ、窪川氏は、その著「石川啄木」で鋭い分析のさえを見せ、啄木の小説は「日本の自然主義にかけていたところの最も重要なものを持っていた」と評価、作品にあらわれた特色として、「第一に啄木は、人生に対して決して第三者的でありえない」こと。「第二に、作者の意図ないしは作品のテーマがはっきりしている」こと。「第三に作品の世界はすべて社会的に開放されている」こと。「第四に、作中人物の性格がみなよく捉えられている」こと等を挙げ、「病院の窓」・「鳥影」・「赤痢」・「道」・「我等の一团と彼」をすぐれたものとしている。

以上の所説には大体において賛成だが、それが更に発展し、たとえば長篇「鳥影」をして、「本格的な骨組をもったロマンの『雛型』」であり、近代文学に十分な発展をとげることのできなかつた社会性の明確な批判的リアリズムの精神の、まったく稀な、それ故に孤立的な達成であった<sup>(6)</sup>。とするようになってくると多くの注釈をほどこさねばならないと思う。

いうまでもなく、「鳥影」は彼の郷里浜民村に材をとり、封建的な素封家小川家の長嗣として、しかも似而非近代文化を身につけた

行にともなうて当然近代の俗物小川信吾との親友関係のきりかわり  
 が用意されなければならないのに、特にその点が何等深められていない。彼と村の医師加藤との場合も同用のことが指摘される。

窪川氏も、やはりこうした吉野の形象不足に気付きながらも、彼の語る「夢を見る暇もない都会の烈しい戦争のなかで、間断なしの圧迫と刺戟を享けながら、切迫塞った孤独の感を抱いてある時ほど、自分の存在の意識の強い事はありませんね」という言葉を引用して次のように論ずる。

これほど「鳥影」のかくされた思想的要素を語っているものはない。……啄木を内面的にさゝえていたものはこの思想であった。孤独とは要するに、社会と個人との対立における近代的人間の自覚の現実との対決の方法にほかならなかった。……自己の存在の意識とは、その対決における主体の意識にほかならなかった。……対決における主体の意識が強ければ強いだけ、いよいよ現実に対する批判的精神はげしいものとなる可能性があるけれども「対決」における主体そのものはどこまでも主観的に絶対的なものであった。……吉野は作者啄木のかかる「主体」の表徴であり、その擬人化されたものともいふべき人物である。だからこれを紹介、説明することはできるが一人の人物として客観的に描くことはできないし、その必要もないわけである。(傍点引用者)

右に長々と引用したが、これは窪川氏の論理の倒錯ではないだろうか。

第一に、対決における啄木の主体が「主観的に絶対的」であったと述べているが、そうした場所からは自己の発展というものがあ

信吾と、それに全く対立的な、独立した人間的健康さを貯えた女教師、日向智恵子を軸として、さまざまな人間関係の、たくみな設定を通して展開されており、彼の全作品のなかで最もスケールの大きなものとなっている。

窪川氏は、啄木の小説の特色が、成功的に鋭く發揮された代表作として、とらえているのであるが、氏の熱心な所論にもかゝらず、なおこの作品を色濃くおぼっている風俗的な匂いをぬぐい去ることはできない。

啄木自身はこの作品を、東京毎日新聞に連載の直前、すなわち十月二十六日新渡辺仙岳宛書簡には次のように書いてある。「何分連載物故厳密に言へばノーヴェルでなくストーリーと言ふべきものでなくしては都合悪く聊か自負心を傷け候へども長篇の処女作に候へば相応に苦心いたし居候」と。またすでに完結後二ヶ月を経た翌四十二年三月二日宮崎大四郎宛書簡には、「あれは自分でも少しも自信のないホンの新聞物」といつている。作者自身のなした価値評価をそのまゝ客観的な場へ適用するのはとめてさけるべきことだが、右の啄木の発言は、「鳥影」が本質的にもつて欠陥を結果としてはある程度いゝあてゝいるのではなからうか。

すなわち、この作品では、登場人物の交渉関係面に重心がかゝりすぎ、そのためにかえてシチュエーションの内部における、人間の個としての掘りさげた造型がうしなわれるという、矛盾を生んでいる。したがって、それがいたずらに風俗性を印象づける結果となっているのである。なかでも、日向智恵子の恋愛の相手として、重要な位置を占める吉野満太郎の人間形象がぼやけており、恋愛の進まない。したがって、それでは啄木の主体の变革を説明しきれないし、事実において、本稿第二章に論じたように、「鳥影」執筆の前後にわたる一年余、絶望的な人間としての危機を体験し、たえず動揺をくりかえしていたのであり、結果的にいえば、国民的な場への主体变革の悶を味わっていたのである。第二には、「吉野が啄木の『主体』の表徴」であれば、「紹介、説明することができが、一人の人物として描くことはできないし、その必要もないわけ」とは一体どういうことなのだろうか。こうした問題の是認がそのまゝ、横たわって「すぐれた」「達成」との評価を下すわけにはいかないであらう。

つまりまっとうな近代小説においては、自己の主体の苦悩が深ければ深いほど、その人間再建の可能性を「客観的に描き」だしているし、また描き出さねばならないはずのものである。それは単に、現実の「紹介、説明」ではなく、虚構を媒介とした文学的現実の場の創造である。島崎藤村は、「破戒」において自己の秘密と孤独の苦しみを語る時、社会の最下層を背負った人間を通して、「客観的に」形象していったのである。ところが「鳥影」においては作者自身の主体の深刻さにもかゝらず、それが「紹介、説明」であるとき、文学としての敗北にちかひ意味をそこに見出さねばならないだろう。

以上、私は窪川鶴次郎氏の所論に固執しながらも、「鳥影」を考えてきたが、これは決して氏のあげ足とりでなく、啄木における主体と小説形象の相剋に照明をあてたからに外ならない。

つまり啄木は、日本近代文学者のなかでまれにみる主体を自己の

なかにつくり出していったが、結局のところ、その鋭い現実認識を小説形象の世界に結実させるリアリズムを、みずからの手で自己の創作方法としてつかみだすことができなかつたのである。

すでに七十数年前、周知のようにエンゲルスは、「典型的な諸性格の表現」としてリアリズムをとらえ、バルザックの小説を例にひいて、形象の世界におけるリアリズムの力は、主体の認識をこえうることを指摘したが、啄木の場合、文学の方法を小説において真に自己に即したるものとして確立することができなかつたのだ。

現存作品十五篇のうち未完の作品が六篇、断片原稿三十九篇という数字は、事実においてそれを実証しているといえよう。したがって、「鳥影」の外彼の作品のなかでも比較的勝れたものとして挙げられる、「病院の窓」・「赤痢」・「道」・「我等の一団と彼」もなお高度な分析にたえうる作品ではない。

けれどもそのなかで「赤痢」は文学として欠陥が一番すくなく、成功した作品となっている。内容は惨憺たる赤痢の猖獗を媒介に、岩手の山村の恐怖におびえた人々を侵蝕する新興宗教を批判的に描きながら、上りな日本近代の封建的支柱である、貧困無知の貯水池農村の実態をなまなましくつたえている。そして、最後に呑んだくれのやもめ女お由が、赤痢にとりつかれて宗教をのしりながら、のたうつ状景のクライマックスも生き生きと、すぐれた完結性を示し、加えて方言の自由な駆使もあつて構成ゆたかな作品である。しかしなお、その欠点となっているのは主人公横川松太郎の人間形象の不足である。

このように、若い啄木は、小説における文学の方法としてのリア

リズムを、その必死の努力にもかゝらず、つかみとることができなかつといえるのであるが、そうした主体と形象の相剋という、絶望的な苦悩のあわだちが、彼の短歌に結実していったのだとみなければなるまい。

彼自身は次のようにいつている。あまりにも有名だが録する。

私は小説を書きたかつた。否書くつもりであつた。又実際書いても見た。さうして遂に書けなかつた。其時恰度夫婦喧嘩をして妻に敗けた夫が、理由もなく子供を叱つたり辱めたりするやうな一種の快感を、私は勝手気儘に短歌といふ詩形を虚使用する事に発見した。(「弓町より」明)

だから晩年の啄木にとっては、歌は「悲しき玩具」であつた。第一歌集の書名を「仕事の後」と予定し、歌稿ノートの標題を「ヒマな時」と名づけたのも理由のないことでなかつた。

言うまでもなく、短歌は日本固有の文学として長い伝統につちかわれてきたが、それゆゑ確立された定型のなかへ、社会的な場をもとめる個の外向性をもすればしぼり込む韻律的構造を育てた。だから、小説形式の近代性を発見した啄木は、短歌に対して意識的に反撥したのは当然である。彼は書いている。

詩歌には技巧を重んじ、格調の制約に従ふ点に於て、猶多少の遊戯的分子あり、切実ならず、小規模なり、遂に真に深く近代人の情緒を歌ふべからず。(明治四十一年七月七)

歌なんぞ煙草と同じ效能しかない。(明治四十一年七月十八)

にもかゝらず、彼は前述のように短歌に回帰せざるを得なかつたのである。それは、自己のたゞかに、社会的、文学的基礎を与え

られることのなかつた、存在のいたましい自己確認であつた。「一握の砂」刊行直後にさえ、「歌を作る日は不幸な日だ。刹那々の偽らざる自己を見つけて満足する外に満足のない、全く有耶無耶に暮らした日だ。君、僕は現在歌を作つてゐるが、正直に言へば、歌なんか作らなくてもよいやうな人になりたい。」(明治四十四年一月)と痛切にもらしてゐる。

だが、客観的には短歌の世界へ啄木のような主体をもちこんだことは、短歌の伝統に対する鋭い反逆であつた。つまり、その結果として、すでに評価されているように、素材の生活的拡大、文語的なそれをのりこえての口語的発想法への転換、あるいは音数的なリズムを踏みやぶり、内在律的な詩への接近をいどむ三行書き方法の深化など、すぐれた意義をはたしえた。彼の短歌の個々については、岩城之徳氏の実証的研究を始め、さまざまの人による研究成果があるので今はふれない。しかし、啄木は短歌に自己の文学的運命をかけたのではなく、彼自身はあくまでも短歌という詩形を虚使用するを通じて、本質的形象を獲得しえたという関係をみうしなつてはならない。それは、「散文の国土」で苦しめぬいた主体によつてこそはじめて可能だつたのである。

こうして彼の短歌は、今もなお国民的な広さと深さをもつて愛されている。そしてその短歌革新の力と内部にこもっている独自のリリズムの根柢は、彼自身の「閉塞」されつゝある社会的現実への苦闘と、いまひとつは、小説における主体と形象の相剋とどう、彼の苦悩のなかにせめぎあう二重の結び目の底ふかく胚胎したのである。

最後に、彼の詩もやはり短歌と同様、小説との関連なしには理解できないと思う。作品として眺めてみると、何といつても中心にすえられるのは、絶唱ともいふべき「呼子と口笛」十一篇であろう。それらはすべて四十四年六月の作であり、結核性の腹膜炎に助膜炎を併発し、病におかされた瘦身を横たえていた頃のものである。したがつて全作品の底を流れているのは、まゝならぬ全身からの現実に対する激しい焦燥感である。そして社会主義的内容を、格調高うたいあげたものとして近代詩史上、画期的な位置を占めるものと評価されている。

けれども、なおそこに指摘しなければならぬのは、詩論「弓町より」で否定したはずだつた「空想化の手續」が残存していること、更に表現の文語的語法への退化の問題がある。だから必ずしも、短歌のように高く買うわけにはいかない。

しかし、そうした二つの欠陥をある程度突き破りえているのは、「飛行機」である。この詩は「見よ、今日もかの蒼空に 飛行機の高く飛べるを」というリフレインを前後に、「ライダーの独学をする」「給仕」少年、「肺病やみの母」をうたいあげることによつて、大きく言えば、それをうみだしたころの外発的なそして貧困な日本近代のみじめな国民的現実をえぐりえているのではなからうか。

註(一) 同氏著「日本のヒューマニスト」中「石川啄木の人間造型」  
 (二) 岩城之徳氏は小説執筆の事情を分析して啄木の文学的自信と経済的理由をあげておられるが、彼の経済的窮乏は単に直接のきっかけを作つたものにすぎず、小説執筆はその内部的発展の当然のなりゆきだつたと思ふ。

四 結 語

前章において私は、啄木が小説を書いたのは決して岡邦雄氏のいうように「歌作の傍ら」<sup>(1)</sup>書いたのではなく、彼の内部的発展の当然の帰結であったこと、しかしながら、その小説の前では方法としてのリアリズムを確立することができず、主体と形象の相剋という文学するものにとって致命的な絶望・苦悩をあげたこと、そして逆にその敗北感のはねかえりが、短歌と詩への回帰を導き、すぐれた文学的達成が彼の意図そのものをこえて、特に短歌においてなされたということなどを考察した。

私は、こうした視点こそ、啄木の文学の複雑な全容を明らかにする根本的な鍵だろうと思う。

けれども、ここで補足しておかねばならないのは、彼の小説は文学としての高度な分析にはたええないといっても、前掲の窪川鶴次郎氏がその特色としてあげた事項は全く否定されるものではなく、——もともと第四の「作中人物の性格がみなよく捉えられている」との項をのぞいては——、それ故にこそ、彼の小説がもつ問題意識の確かさにおいて、自然主義文学的流産の状況のなかで、特異な位置を文学史的に占めねばならないし、また要求しなければならぬだろう。かつては全く無視されていたからである。そのために「雲は天才である」「鳥影」「赤痢」「我等の一団と彼」等を挙げうるだろう。

結局、総体的にいつて、明治四十年代という国民の下からの民主的な力が未成熟な冬の時代に、啄木は文学の主体と形象の分野において、模索的なたゞかいをちみどろに展開したのだと言つてよい。

- (3) 同氏著「石川啄木伝」百四十一頁参照。
- 同氏著「プロレタリア文学の展開」。講座「文学」第五卷二百三十頁。
- (4) 同書百七十一頁。
- (5) 同書(五月書房版)百三十二頁〜百三十五頁。
- (6) 同書百三頁。
- (7) これは当時必ずしも絶対的条件でなかった。「文学」昭和二十九年六月号新聞小説特集号参照。
- (8) 同書百九頁〜百十頁。
- (9) 「雲は天才である」・「漂泊」・「札幌」・「刊余の叔父」・「足跡」・「我等の一団と彼」

(10) この詩の飛行機は、給仕の夢の象徴としての意味に従来解されてきた。しかしもつと突込んで「蒼空」を独占している権力の象徴として捉え、国民的現実との階級断層を対比的・暗示的に歌っていると解しえないだろうか。「見よ」という命令形には、はげしい糾弾の意をこめたと考えられないだろうか。当時、たしかに飛行機は物珍しいものだった。けれども、啄木の明治四十二年四月十三日の日記には、  
\* ATARASHIKI MIYAKO NO KISO, と題するローマ字詩があり、飛行機を人間の生活破壊の「宮中軍艦」としている。事実四十三年末に陸軍省が飛行機を買い入れた。「俺の頭にある考へは、みんな書くことの出来ない考へばかりだ」といたましく語っている啄木は、新聞社の一員としてその間の事情を知っていたものと思う。

それはかつて、二葉亭四迷や北村透谷・国木田独歩が、それぞれの歴史的条件のなかで、それぞれの努力を孤立的にふりしぼってきたところのものと共通する。

もちろん、二十七才でその生涯をとじた啄木に巨大な骨格を認めることはできない。しかし、その苦闘と創造の生涯は若々しく、あたたかも光芒の輝やきに似てするどい。けれども、文学者啄木にとつて何より皮肉なのは、自己の内部的発展の結果として否定しなけれ

受贈誌(昭和三十四年一月〜三月)	明治書院
古典	七 天理図書館
ビブリア	十三 実践文学会
実践文学	第六号 明治学院大学文経学会
明治学院論叢	第五十二号・一 駒沢大学史学会
駒沢史学	第七号 駒沢大学地理学会
駒沢地学	第一号 初音書房
国語教育	二一四 穂波出版社
実践国語教育	二一九〜二二二 肇国神祇聯盟
肇国	二一七〜二一九 日本大学広報室
桜門	創刊号

ばならなかった短歌において、その文学的形象の勝利をみなければならなかったことであろう。

註(1) 前掲「若き石川啄木」百七十二頁。

(2) 小説「我等の一団と彼」に対する窪川鶴次郎氏の分析には疑問を感じる。本誌二号小稿「『我等の一団と彼』における啄木の問題」参照。

層	二一四月号	層	雲社
滋賀大学	第八号	滋賀大学学芸学部	
学芸学部紀要	六	佐賀竜谷短期大学	
賀竜谷学会紀要	六卷九	高知大学	
高知大学	十二・十四	人文科学	
学術研究報告	第七号	岐阜大学学芸学部	
岐阜大学	第十号	宮内庁書陵部	
研究報告			
書陵部紀要			